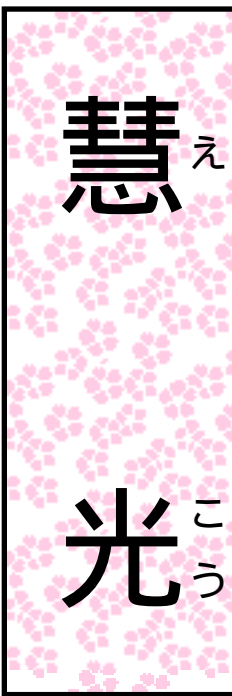




千両の実かな? (当山境内地にて・1月9日撮影)



金光寺寺報 第187号 発行所 金光寺 宮崎県西臼杵郡 五ヶ瀬町大字鞍岡 5927番地 0982 83-2338

今月のことば

無明の闇を破するゆえ 智慧光仏となづけたり

1月の法語は、『浄土和讃』の中の冒頭、「讃阿弥陀仏偈和讃」の第九首のはじめの二句です。阿弥陀さまの智慧の輝きである「智慧光」を讃嘆されて、「如来の智慧の輝きは、私どもの無知の闇を打ち破ってくださる」と讃えられています。『仏説無量寿経』には、阿弥陀さまの大いなるはたらきを、「十二光仏」の仏名をかかげて称讃されている場面があります。また、中国浄土教の基礎を築かれた曇鸞大師は、『讃阿弥陀仏偈』という、「十二光仏」を讃えられる偈文を作られました。親鸞聖人は、これら經典や祖師の言葉に基づいて「讃阿弥陀仏偈和讃」をご制作になられましたが、「十二光仏」の第八に「智慧光」が挙げられています。

「智慧光仏」とは、仏としてすべてを見通される智慧 - 私どもの知識や言葉の世界をはるか

に超えた、あるがままの真理(真如)をさとる智慧のちから - が、すべてを照らし出す輝きをもっているということが示されているといえるでしょう。

自己中心にしか動くことのできない私どもは、真実を知るすべを持たず、無知蒙昧の中にあつて、自分勝手に貪るような欲望によってさまよっぱかりです。さらに、そのような欲望が満足できないために、怒りや恨みを生み出します。これら葛藤する激情が「煩惱」といわれ、お釈迦さま以来、説き示されてきた私ども「煩惱具足」の姿であります。このような私どもを、無知の闇、煩惱の闇からさと(正覚)の世界へと救い出してくださいと願うのが阿弥陀さまであり、それが「智慧光仏」と呼ばれるゆえんです。

(本願寺出版社刊「大乘」誌より転載)

仏事お休みのお知らせ

下記の日は緊急を除き、仏事は行いません。ご協力をお願いします。

Table with 4 columns: 月, 日, 終日, 午後. Rows for 1月 (16, 20), 2月 (7, 8), 3月 (2), 4月 (3-5, 14).

12月、次の金光寺門信徒の方がご往生なさいました。謹んでお悔やみ申し上げます。2016年12月12日寂満89歳 芋の八重 田崎 励様 2016年12月16日寂満94歳 中園 篠原 カズ子様 2016年12月27日寂満80歳 丁子 梶原 良子様 (先月号の本欄で西村茂様の行年を86歳と誤って掲載しました。正しくは96歳です。訂正してお詫び申し上げます。)

ホームページ開いています。 URL http://konkhoji.jp/ 1月9日現在 アクセス数 78,534人

私的にはすごいスピードで過ぎていった二〇一六年でした。四月におこった熊本地震、震源地の益城町は被災した倒壊の恐れのある住宅は解体され、土地は更地になってしまいました。それ以外にも阿蘇山の突然の噴火、北海道の大雨による災害など、災害列島と呼んでいいような日本でした。熊本の現場を訪れれば当時の記憶は戻りますが、平生はその記憶も風化しそうな感じで時刻(とき)が過ぎていきます。そんな私に勇氣と感動を与えてくれたりオリンピックピック・パラリンピックの日本人選手の活躍。男子体操、競泳陣、柔道、バトミントンそして陸上男子のリレーなどテレビでその一瞬一瞬をプレーバックしてくると記憶は戻ります。が、すごい速さで衰えていく記憶力は、私の脳裏からそんな一瞬一瞬を残り少なくなる私の人生という時間とともに消し去っていきま。二〇一七年、もう少しゆつくりしたスピードで、衰えていく知力・体力とつきあう一年にしたいものです。今年もヨロシク。(住職 松井卓郎)

仏教用語豆辞典

兎と角

「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。」 夏目漱石の『草枕』の冒頭の

名文です。「とかく浮世はままならぬ」とかく人間というものは「彼には、とかくのうわさがある」と、とかくは、いずれにしても・やもすると・あれこれ等々意味し、とにかく・ともかく・とやかくなどに転化された副詞です。この「とかく」を「兎角」と書くのは、あて字だそうです。仏教には「兎角龜毛」という言葉があります。「兎の角(つ)の」や「龜の毛」は、本来実在しないものですから、現実には無いのに、有ると錯覚したり、

実体が無いのに、有ると幻想したりするとき、譬喩的に用いられる語です。仏教の中心思想である「縁起」や「空」を説くときよく使われ、迷いの世界の現象を表わす言葉となつていきます。それが何故「とかく」のあて字になつたのかわかりませんが、兎に角、錯覚や誤解ばかりしてると、この世は、よけい住みにくくなります。(本願寺出版社発行 辻本敬順著 仏教用語豆辞典一〇〇 PART 一から)

住職ひとりごと



# 念 声 是 一

二〇一七(平成二十九)年を迎えることができました。本年もお念仏相續ができますことありがたいことです。

今月三日、仏事(ご自宅での五・七日忌法要)のご縁がありました。続いて四日はご自宅での一周忌と十三回忌の併修、七日は同じくご自宅での四・七日忌遠夜法要のご縁でした。

普段の仏事では、「おはようございます」「あるいは「こんにちは」とごあいさつを申し、おつとめを始めます。

今回は新年早々の仏事、通常ですと「あけましておめでとうございませす。旧年中はお世話になりました。本年もどうぞよろしくお願ひします」と新年のごあいさつを申しあげるので、七日までのご縁はいずれも身近な方と死別され、初めてのお正月でした

ので、おめでとうは申さず、「旧年中はお世話になりました。さんご不在の寂しいお正月でしたね。本年もよろしくお願ひします」とごあいさつを申しあげたことです。このご縁で、私たちの生活はほとんどにおいて人に対して何らかの思いを心におこし、その思いを口に出だし、声にして相手に伝えていくのだから、ということに思い至りました。

あいさつをする、感謝の思いを伝える、親に対して自分の進みたい道を伝える、人に対してしてほしくないことを伝えるなどなど。ただし、人に対して悪口など悪意の感情はなかなか声に出すことはできませんが(大げんかをした時など、口にすることもありませすね)。そう考えながら、

法然聖人が「選択本願念仏集」で「本願章」でお示しになられた「念・声は是れ一なり」

のご文についてふれられた蓮如上人御一代記聞書の「念声是一」という言葉があります。念は心に思うことであり、声は口に称えることですから、これが同じであるというのは、いったいどのような意味なのか「わかってませす」という質問があったとき、蓮如上人は、「心の中の思いは、



おのずと表にあらわれると世間でもいわれている。信心は南無阿彌陀仏が心に届いたすがたであるので、口に称えるのも南無阿彌陀仏。心の中も南無阿彌陀仏、口も心もただ一つである」と仰せになりました。

世間のことでも心の中の思いは自然と表にあらわれてくる。信心をいただいたら心の中に南無阿彌陀仏が届き、その姿が口に南無阿彌陀仏というお念仏となつて当然あらわれてくるというお示しです。

そこで、元旦会のおつとめをしている時、ご参詣の方々のお参りのすがたをうかがいながら、口にお念仏が出る方もあれば、出ない方もあるな、救わずにはおかないとはたつき続けてくださる阿彌陀さまに対して、報恩感謝・仏徳讃嘆の思いを、多くの方が「南無阿彌陀仏」と声に出だす日暮しをつとめていただきたいなと思つた、二〇一七年の初春でした。

## 法語の世界

### 原文

心中を改め候はんと申す人、なにをかまづ改め候はんと申され候ふ。よろづわるきことを改めてと、かやうに仰せられ候ふ。いろをたて、きはを立て申しいでて改むべきことなりと云々。なににてもあれ、人の直さるるをききて、われも直るべきと思つて、わがとがを申しいださぬは、直らぬぞと仰せられ候ふと云々。

(蓮如上人御一代記聞書 二百二)

### 現代語訳

今までの心をあらためようという人が、「どんなことをまずあらためたらよろしいでしょうか」とお尋ねしたところ、「悪いことはすべてあらためなさい。それも、心の中をはつきりと表に出して、あらためるといふことでなければならぬ。どんなことであれ、人が直すことができたといふことを聞いて、自分もそのように直るはずだと思ひ、自身の悪いところを打ち明けなかつたら、直るものではない」と、蓮如上人は仰せになりました。

### 法事日時予約について

法事の日時について、ご連絡をいただいた順に日程を決めています。希望の日時がありましたら、早目にご連絡ください。なお、年回忌法要はお命日を過ぎてつとめても大丈夫です。

### 初盆会の日程について

毎年、初盆会にご連絡を頂いた順に日程を決めています。本年初盆をお迎えするお宅で、時間を決めて法要後のお齋をお考えのところは早目にご連絡ください。なお、本年8月13日午前11時はすでにご予約がありました。

あけまして  
おめでとつございませす  
本年もよろしくお願ひします

二〇一七年一月

金光寺役員一同  
金光寺寺内一同

